

『本朝麗藻』全注釈(七)

今 浜 通 隆

△承前▽

本詩(上の9)の内容についてであるが、まず、首聯では、例の通りに、詩題の「花鳥ハ春ノ資貯タリ。」に即して詩をおこしている。斉信の詩(上の8)の〔評説〕ですでに述べたように、ここでも、その詩題である「花鳥春資貯」の五文字(五言詩の一句であろうが、出典未詳。)は構成上から「花鳥」(二言)と「春資貯」(三言)とに分けられ、それぞれが首聯の第一句目と第二句目とに配置されている。しかし、本詩の場合、現存する斉信や通直や匡衡のそれが、同じように「花鳥」を第一句目の冒頭に配し、「春資貯」を第二句目の同位置に配しているのに比較して、その配置の場所や方法は複雑である。「春多_三資貯」「足_三相尋_一、非_三萱花_一飛也鳥吟。」となつてゐる。まず、配置の場所が逆になつており、第一句目に「春資貯」が、第二句目に「花鳥」が配置されている。次に、配置の方法も工夫されており、単なる並列ではない。飛び飛びに複雑な方法で配置されている。

○平仄仄仄仄平、平平平仄仄平(斉信)。

○平平仄仄仄平、仄仄平仄仄平(公任)。

「本朝麗藻」全注釈(七)

○平仄仄仄仄平、平平平仄仄平(通直)。

○平仄仄仄仄平、仄仄平仄仄平(匡衡)。

現存する斉信・公任・通直・匡衡の同題詩の首聯の平仄を調査してみると以上のようなになる。まず注目されるのは、公任を除いた他の三人の詩が、七言詩では偏格とされる仄起こり式(第一句目の第二字に仄字を使用)を採用していることである。公任の詩だけが正格の平起こり式である。近体詩の平仄式に照らしてみても、公任の詩の首聯は、確かに第二句目の第二字が孤仄となっているが、例えば、通直や匡衡のものも第一句目の第四字が孤平となっているし、まして、斉信のものが第一句目の第二字と第三字がそれぞれ孤仄と孤平を犯し、あまつさえ、第一句目が二四不同の大原則を守っていないことなどを考えあわせると、それは割合にうまく整えられているように思う。

最初に、春には財宝とすべき素晴らしいものが多く、どうしてもそれらを探ね求めずにはいられない、と述べる。斉信・通直・匡衡のそれが、ともに「花鳥」とうたいはじめ、それをそのまま「春資貯」に結びつけているのに比較すると、公任のそれは内容的にも複

雑である。

齊信などのその場合には、あくまでも「花鳥」と「春資貯」とは同格である。「花鳥」はそのまま「春資貯」なのであり、「春資貯」はそのまま「花鳥」なのである。「春資貯」は「花鳥」に限定されている。ところが、公任の場合には、決して「花鳥」と「春資貯」とは同格ではない。確かに、「花鳥」はそのまま「春資貯」なのであるが、しかし、「春資貯」はそのまま「花鳥」ではない。「春多資貯」とあるように、春には「花鳥」のほかにも「資貯」となるものが多いのである。「春資貯」は「花鳥」だけに限定されてははず、その範囲は広い。

春には財宝とすべき素晴らしいものが多く、どうしてもそれらを尋ね求めずにはいられない、と第一句目で述べた公任は、次に、「花鳥」こそがそれらの代表である、と第二句目で言うのである。「花鳥」が「春資貯」の代表であることを明かす。その代表である「花」が今、乱れ散っているだけではなく、同じく「鳥」がさらにさえずり歌っているではないか、どうしてそれらを尋ね求めずにはいられないよう。作者（人々）の、「花」と「鳥」とを尋ね求めずにはいられない気持が、いかに強く激しいものであるかを言明する。作者は、「花鳥」を「春資貯」の代表とみなすことによつて、また、「春」から「花鳥」へと対象物を具体化することによつて、それらを尋ね求めずにはいられない自身（人々）の気持のたかまりを、すなわち、自身（人々）の風流心の強さを、齊信など（詩題そのままに、「花鳥」と「春資貯」とを同格にしている。）に比較して、はるかに巧みに表現しているように思う。

つまり、公任の首聯には、詩題「花鳥春資貯」に即しながらも、齊信などのそれと違って、少しくその詩題を超えようとしている点も認められる。技巧と工夫が形式・内容の両面において認められる。次に領聯（第三句目と第四句目）である。

○積応能散風前色、貪欲相伝露底音（齊信）。

△仄平平仄平平仄、平仄平平仄仄平。▽

○裁錦惜得風底色、貫珠衛得月前音。（公任）。

△仄仄仄平平仄仄、仄平平仄仄仄平。▽

○生涯被養飄林色、行路不貪出谷音。（通直）。

△平平仄仄平平仄、平仄仄仄仄仄平。▽

○遲風貨殖推濃艶、暖雨廻成積好音（匡衡）。

△平平仄仄平平仄、仄仄平平仄仄平。▽

上記のように、齊信・公任・通直・匡衡の領聯とその平仄を並列してながめてみると、形式・内容の両面における異同がよく理解できる。形式面では、勿論、四聯ともに対句形式が採用されているが、これは近体律詩の原則通り。それよりも、第四句目の末尾がまったく同じ「音」字になっており（押韻）、しかも、第三句目の末尾もほとんど同じ「色」字（匡衡の「艶」字は、「色」字と同じ仄声であり、意味的にも近い。その上、視覚的にも「色」字が認められる。）で統一されていることが注目される。確かに、作文会での作品には用語法上ありがちなことであつたらしく、例えば、寛弘三年三月四日の東三条邸花宴での作文会（詩題「度水落花舞」で詠じられた道長以下十一首のものも現存詩をながめてみると、第三句目の末尾に「処」字を使っているものが四首、第四句目の末尾に「程」字を使っている

ものが五首と、同字の同位置での使用は目立つのであるが、それでも上記の四聯の場合ほどにはつきり統一されてはいない。上記の四聯はより珍らしい形式と言えよう。これは、第三句目と第四句目の末尾に「色」字と「音」字を使用した詩四首が偶然に残ったためなのであろうか。あるいは、このたびの作文会での事前の約束ごとのせいなのであろうか。どうも、後者のような気がしてならない。

それと、やはり形式面(用語法)で注目されるのは、すでに〔語釈〕の項で述べたが、齊信と公任との領聯における用語法上の類似点である。齊信の第三句目には「風前色」とあり、第四句目には「露底音」とある。公任の第三句目には「風底色」とあり、第四句目には「月前音」とある。しかも、それぞれが同位置におかれているのである。とりわけ第三句目の場合には、「前」と「底」が異なっているにすぎない。勿論、意味的にもほとんど変わりがない。その上、これらの「前」と「底」とが、互いに交替して、それぞれの第四句目の同位置に収まっている。とても偶然とは思えないほどの類似点である。

平仄法の上からながめても、近体詩としての「二四不同」「二六対」「下三連」などの大切な原則は、きちんと四聯ともに守られている。ただし、齊信のものには孤仄が二つ、第三句目の第四字と第四句目の第二字が認められ、通直のものには孤平が一つ、第四句目の第四字が認められる。公任と匡衡のそれは、さすがにきちんと整えられており、しかも、それぞれが第三句目と第四句目の同位置の平仄をすべて逆に対応させている(例えば、公任の場合、第三句目の第一字が「平」であるのに対して、第四句目の第一字は「仄」、

同じく、第三句目の第二字が「仄」、第三字も「仄」であるのに対して、第四句目の第二字は「平」、第三字も「平」というように、平仄を互いにすべて逆に行っていること)。みごとな技巧・工夫として注目される。

内容的には、この公任の領聯は、当日の作文会の主催者である道長の風流心の強さをひたすら称賛している。国の政事にたずさわりの、民の教化につとめている日頃多忙な主催者・道長も、今日ばかりは、その風に散る花の色を惜しまれ、その月に歌う鳥の声に心を動かされて、このように風流な遊宴(作文会)を開かずにはいられなかったのだ、と述べている。すべては道長の風流心のおかげだと言っているのであるが、道長が、国の政事や民の教化に心をくだいていた一方で、風流心を常に忘れなかったということは、例えば、匡衡も別の所で、「今ハ聖主(一条天皇)ノ親舅・左丞相(左大臣の道長)、亦タ洛陽(左京)ニ宅シテ宴飲ス。蓋シ輔佐ノ余暇ニ乗ジテ、物色ノ賞ス可キヲ惜シムナラン。」(「本朝文粹」巻八「三月三日陪左相府曲水宴、同賦因流泛酒」)と言っている。

第三句目は、「色」とあるから「花」を、第四句目は、「音」とあるから「鳥」をそれぞれ直接に指示している。首聯において「春資貯」の代表であると述べた「花鳥」を、その順序通りに、第三句目と第四句目にそれぞれ分配しているのである(ただし、これは上記の四聯ともに同じ)。勿論、「錦ヲ裁ツ」とは、眼前に乱れ散る花のあざやかな色彩を外面的には直叙したものであろうし、「珠ヲ貫ヌ」とは、耳辺にさえずり歌う鳥のさわやかな音色を外面的には直叙したものに違いない。つまり、作者は、ここでは、まず、「春

資貯」の代表である「花鳥」を自身の視覚と聴覚とでありのままにとらえ、そのあざやかな色彩とそのさわやかな音色とに感動し（外面的な意味）、その次に、その感動をそのまま使って、主催者・道長の政事家としての素晴らしき、道徳家としての有り難さを比較する（内面的な意味）、という二段構えの技巧を駆使しているのである。第三句目では、あざやかな「色」（花）から「錦」を連想し、「錦」から「錦ヲ裁ツ」（素晴らしい政事家）を連想して道長に結び付け、第四句目では、さわやかな「音」（鳥）から「珠」を連想し、「珠」から「珠ヲ貫ヌ」（有り難い道徳家）を連想して道長に結び付けているが（さわやかな「音」から「珠」を連想したのは、例えば、「珠吭」△しゆかう・玉を転がすような美声の意。吭は、のど。▽や「珠喉」△意は同上▽や「珠円玉潤」△珠玉のように円く潤いのある美声の意。▽などの語句があるからであろう）、その外面的意味から内面的意味への連想の展開はまことに見事な出来ばえ（技巧・工夫）と言えよう。すでに〔語釈〕の項で述べたように、前者は「左伝」△「襄公三十一年」条▽を、後者は「礼記」△「楽記」篇▽を出典としている。

なお、公任の頷聯と比較すると、他の三人のそれには、意味上、連想の展開はあまり見られない。まず、通直と匡衡の場合には「花鳥」の素晴らしさを言っているだけで、まさしく文字通りの外面的意味しか見出せないし、斉信の場合には、確かに、第三句目などは「礼記」△「曲礼」篇上▽の語句を出典にして、あたかも「春」は「賢者」のように蓄積した財（花）を散じて人に施す、と言っており（第四句目の出典は未詳）、そこに連想の展開を認めることはで

きるが、公任のそれほどには明白でないように思う（斉信の第三句目の場合、乱れ散る「色」△花▽から「散財」を連想し、「散財」から「賢者」を連想して春に結び付けているが、主催者・道長との結び着きが今一つはつきりしないし、動作・状態から動作・状態への連想ということもあるが、乱れ散る「色」△花▽から「散財」への連想には、少しく飛躍があるように思える。）。さらに頸聯（第五句目と第六句目）である。

○頽景餘糧三月語、後旬生計一園心（斉信）。

△仄仄仄仄仄仄仄、仄仄仄仄仄仄仄。▽

○林勝茅土三千戸、谷咲華山一萬金（公任）。

△仄仄仄仄仄仄仄、仄仄仄仄仄仄仄。▽

○落蕊封來応三万戸、清歌募得是千金（通直）。

△仄仄仄仄仄仄仄、仄仄仄仄仄仄仄。▽

○露聚三玉顔、霞蔵三繡羽直千金（匡衡）。

△仄仄仄仄仄仄仄、仄仄仄仄仄仄仄。▽

形式面では、斉信以下の四聯は、これも近体律詩の原則通りに対句形式を採用している。用語法では、第五句目の末尾に、公任と通直との二人が「戸」字を同じく置き、第六句目の末尾に、公任と通直と匡衡との三人が「金」字を同じく置いている（押韻）のが注目される。また、斉信と公任との第五句目には、「三」字が、同じく第六句目には、「一」字が同位置に配置されており、さらに、通直と匡衡との第五句目には、「万」字が、同じく第六句目には、「千金」の語が同位置に配置されている（なお、公任の場合には、「千」に、「千」字を第五句目に、「万」字を第六句目に配置している。）。

それぞれに用語上の類似点が目立つが、なかでも、これらの頸聯においては、数詞が共用されていることに注意する必要があるだろう。

平仄法では、斉信に孤仄が一つ（第五句目の第二字）、公任に孤仄が一つ（第五句目の第四字）と孤平が一つ（第六句目の第四字）、それぞれ認められるが、公任と通直との頸聯が、その第五句目と第六句目の同位置の平仄をすべて逆に対応させていることにさらに注意。とりわけ、公任の場合は領聯もそうであった。彼の技巧・工夫を知るべきであろう。なお、公任の第五句目の第二字「勝」は、やはり、どうしても平声（「広韻」の下平声・一六蒸）でなければならぬだろう。そうでなければ、「二四不同」「二六対」の大原則を犯すことになるからである（仄声の場合は、「広韻」の去声・四七證）。

内容的には、上記の斉信以下の四聯は、すべて、「花鳥」を目にし耳にすることによって生まれた精神的な満足感を物質的な満足感に置き換えて比喩している。比喩表現である。その精神的な満足感が一体どれぐらいなのか、ということを物質的なそれに置き換えて具体化している。

ただし、具体化の度合からいうと、やはり公任のそれが、「三千」とか「一万」とかの具体的な数字をあげ、その上、それらの数字に「茅土」や「華山」などの修飾語を付加している点で、より優れているように思う。その意味する所が、非常に単純でわかりやすい。公任の第五句目には「花」が、同じく第六句目には「鳥」が、勿論、それぞれ継承してうたわれている。ただ、この点だけは、確かに、他の

三聯に比較して（例えば、斉信の第五句目には、「語」△鳥のさえずり▽とあって「鳥」を継承していることが、同じく第六句目には、「心」△花蕊▽とあって「花」を継承していることがはっきりと指示されている。通直の場合にも「落蕊」や「清歌」が、匡衡の場合にも「玉顔」や「繡羽」が、それぞれ「花」と「鳥」とを継承してうたわれていることをはっきりと示している。なお、その継承の仕方であるが、斉信の場合には、第三句目が「色」とあって「花」を、第四句目が「音」とあって「鳥」をうたっていたから、順序は「花」・「鳥」、「鳥」・「花」となる。領聯と頸聯とはそれぞれ逆の対応にしている。通直と匡衡の場合には、その順序が「花」・「鳥」、「花」・「鳥」となっており、領聯と頸聯とでそれぞれ同じ対応にしている。公任の頸聯にはそれぞれの継承・対応が明示されていないようであるが、第五句目の「林」と第六句目の「谷」とがそれらを暗示していると考えられる。すでに「語釈」の項で述べたように、その「林」は花の乱れ散る林でなければならず、その「谷」は鳥のさえずり鳴く谷でなければならぬと思うからである。他の三人のようには明示せずに、「花」と「鳥」との継承・対応を暗示させようとしているところに、逆に、公任の技巧・工夫の素晴らしさが窺みとれるように思う（結局、公任の継承の順序は、「花」・「鳥」、「花」・「鳥」であり、通直や匡衡のそれに同じ）。

領聯において、当日の作文会の主権者・道長の素晴らしさをひたすら称賛した公任は、一転して、頸聯においては当日の自然の素晴らしさに言及する。人事と自然との対比であり、その転換はあざやかである。まず、花の乱れ散る林に目をやる。もっぱら視覚的に自

然の素晴らしさを把握しようとするからである。次に、鳥のさえずり鳴く谷に耳を傾ける。もっぱら聴覚的に自然の素晴らしさを把握しようとするからである（ここでも、頷聯に引き続いて視覚と聴覚との対比が認められる）。その結果、作者は十分なる精神的な満足感に浸りきることになる。勿論、想像以上の「林」と「谷」の素晴らしさのためである。その「色」とその「音」の素晴らしさのためである。計り知れないほどの精神的な満足感に浸りきった作者なのであるが、仮りに物質的な満足感でこれ計ってみようと思ふ。今のこの精神的な満足感を物質的な置き換えたならば、一体どれほどになるだろうか。例えば、三千戸の封土をいただく場合や華山の一万金を手にする場合に比べて、それはどうであろうか、と。しかし、すぐに作者は結論付ける。それらをいただいたり、あるいは手にする場合に比べても、はるかに今のこの精神的な満足感には素晴らしい。それら以上である、と。この「三千戸」や「一万金」は実数ではなく、あくまでも不特定多数を示す数字であるに違いない。「どれほど多くの」という意味であろう。結局、どのような物質的な満足感とも置き換えることのできない、つまりは、計り知ることのできない今のこの精神的な満足感、という意味になり、それを強調しようとした一聯ということになる。精神的な満足感と物質的なそれとの対比も見事。

最後に尾聯（第七句目と第八句目）である。

○從_レ茲想得非_二貧素_一、每_レ見_二土宜_一任_二醇吟_一（齊信）。

△平仄仄仄平仄、仄仄仄仄仄平。▽

○軟語閑々頻報處、拾_レ葩還耻_二不廉心_一（公任）。

△仄仄平仄平仄、仄平仄仄仄平。▽
○為_二吾末_一有_二陽和德_一、鬢雪甚寒任_二陸沈_一（通直）。

△仄平仄仄平仄、仄仄仄平仄平。▽

○士林今日多_二歡樂_一、攀_二葩采花_一聽_二風琴_一（匡衡）。

△仄平仄平仄平、平仄平仄平平。▽

形式的（用語的）には、「任」字が齊信の第八句目と通直の第八句目の同位置に使用されていることが唯一目立つぐらいで、これまでの首聯・頷聯・頸聯に、同位置における同字や同語彙の多用が目立ったことに比べると、やや趣きを異にしている。特に、第七句目の末尾の字は言うまでもなく、第八句目の末尾にも一つとして同字は使用されていない。注目すべきであろう（例えば、同じ作文会の詩でも、寛弘三年三月四日の道長の東三条邸花宴でおこなわれた時のものには、現存十一首入「本朝麗藻」巻上所収詩題「度_レ水落花舞」のうち、第八句目の末尾に「情」字を同じように配置しているものが六首、同じく「声」字を配置しているものが三首もある）。

平仄法の上では、齊信のものには孤平が一つ（第八句目の第四字）、通直のものには孤平が二つ（第七句目の第二字と第八句目の第四字）、匡衡のものには孤仄が三つ（第七句目の第四字と第八句目の第二字と第五字）も認められる。さらに、匡衡の第八句目では「二六対」の大原則が守られていない。これに対して、公任のそれには一つの拗体も見えない。注目される。

内容的には、齊信と匡衡の二聯が、当日の作文会に招待してくれた主人・道長への感謝の念とその喜びの気持とをひたすら謳歌して一首をしめくくっているのに対して、公任のそれが、前聯に引き続

いて、なおも「花鳥」の素晴らしさに言及し、ついには我が身の不廉を反省すると言つて一首をしめくくつていふことと、通直のそれが、「花鳥」の素晴らしさの中で、我が身のみすばらしさと不遇な身の上とがひとときわ目立つと言つて一首をしめくくつていふことが目を引く。概して言へば、斉信と匡衡の発想が互いにより近似しており、公任と通直とのそれが互いにより近似している。

ただし、公任の尾聯においては、表面的には、勿論、通直のそれのように自身の外形や身の上については言及されていない。あくまでも心の中(内面)を問題にしているのである。第七句目では「歌語」とあるように、第四句目と第六句目との「鳥」を継承し、第八句目では「拾葩」とあるように、第三句目と第五句目との「花」を継承して、なおもそれらを発展させていふのである(他の三人の尾聯においては、もはや、「花鳥」については具体的に言及されていない)。つまり、春には財宝とすべきものは多いが、なかでも「花」(今、かりにAとする。)と「鳥」(今、かりにBとする。)とはその代表なのである、と首聯で詠じた作者は、その後、AB(頷聯)・AB(頷聯)・BA(尾聯)の順でそれらを個別的に、各句ごとに描写する方法を採用しているのである。その技巧・工夫に注目すべきである。

とりわけ、尾聯においては、周囲の、作者をとりまく「花」と「鳥」との素晴らしさを強調するために、「不廉ノ心ヲ耻ズ。」という語句が使用されていて、注目される。それらの素晴らしさを「目」と「耳」でとらえ、それでも足りずに、「心」の問題にまで高めようとしている。とうてい、自己の「不廉ノ心」などでは正し

く対応しきれないほどの素晴らしさだ、という意味であろうが、この詩的表現も極めて技巧的である。

ところで、第八句目の「拾葩」という動作を示す詩語であるが、この中に、あるいは、「拾」字との関連で「拾塵」(塵ヲ拾フ)の故事が意味的に掛けられているとも考えられる(この場合、「葩」は花のチリと見なす。なお、「塵」字も平声)。「拾塵」とは、塵(ちり)を拾い取る意であり、孔子が陳と蔡との国境で賊に囲まれた時、顔淵が飯中の塵を拾うのを見て、米を窃み食いつているのではないかと誤解したという故事である。その出典は「呂氏春秋」ハ「任数」篇Vであり、「孔子、陳・蔡ノ間ニ窮シ、藜羹(れいかう)・粗末なアカザのあつもの(モ斟)マズ。七日モ粒ヲ費(な)メズ、昼モ寝ネタリ。顔回、米ヲ索(もと)メ、得テ之ヲ饜(かし)グ。幾(ほとん)ド熟サントス。孔子、望見スルニ、顔回ハ其ノ甑(そう)・こしき)中ニ攫(つか)ミテ之ヲ食フ。選問(しばらく)アリテ食ハ熟シ、孔子ニ調シテ食ヲ進ム。孔子、伴(いつは)リテ之ヲ見ザルト為ス。孔子、起チテ曰ク、今者(いま)夢ニ先君ヲ見ル。食ハ潔クシテ後ニ饋(おく)レ、ト。顔回、対ヘテ曰ク、不可ナリ。嚮(さき)ニ煤(ばい)灰(はい)たい。煙塵(えんじん)アリテ甑中ニ入レリ。食ヲ棄ツルコト不祥ナレバ、回ハ攫ミテ之ヲ飯(くら)ヘリ、ト。孔子、歎ジテ曰ク、信ズル所ノ者ハ目ナルモ、目ハ猶ホ信ズ可カラズ。特(たの)ム所ノ者ハ心ナルモ、心ハ猶ホ特ム可カラズ。弟子、之ヲ記セ。人ヲ知ルコト固ヨリ易カラズ、ト。」という一文中に見える(なお、「攫塵」(塵ヲつかム)は、意味的には「拾塵」(塵ヲひろフ)に同じ。李白の「雪謔」詩中にも、「拾塵掇蜂、

疑レ聖猶賢。」とある。やはり、「攫」字も仄声。

もしも、「拾葩」という作者の動作を示す詩語に以上の故事が意味的に掛けられているとすると、勿論、作者・公任の「葩」（はな）を手やすく取ろうとする動作は、あの顔淵が飯中の塵を拾ったそれになどえられていることになる。あまりの美しさに思わず花ピラを手やすく取ろうとした作者は、ふと、飯中の塵を拾おうとして孔子の誤解をうけたという「拾塵」の故事を思い浮べたのではないか。顔淵の場合、その誤解を受けた原因はあくまでも「道徳」的な配慮（心）によるものであり、公任のこれから受けるかもしれない誤解の原因はあくまでも「美」に対する執着心によるものなのである。また、手やすくといった物は、前者が甌中の「塵」であり、後者が地上の「葩」なのである。確かに、その原因も対象物も互いに異なるが、作者の公任は、そこに「拾フ」という動作の共通性を見出したのではないだろうか。

顔淵の動作は孔子の誤解を招くことになったが、公任の場合はどうか。勿論、それは当日の作文会の主催者・道長の誤解を招くことになるに違いない（公任自身を顔淵に、道長を孔子にたとえることに注意）。前者の誤解は、顔淵が空腹のあまりに「食」を一人占めにしようとしているのではないか、というものであった。他方、後者の誤解は、公任が「美」への執着心のあまりに「葩」を一人占めにしようとしているのではないか、というものになるに違いない。そして、前者の誤解は、それが顔淵の「道徳」的な配慮（心）が原因であったために、彼の、「不可。嚮者煤炭入甌中。棄食不祥、回攫而飯之。」という弁解で即座にとかれ、あまつさえ、孔子の、

「所レ信者目也、而目猶不可レ信。所レ恃者心也、而心猶不足レ恃。」との感嘆の言葉をも引きだすことになった。他方、後者の場合はどうか。後者の誤解は、それが公任の「美」に対する執着心が原因であるために、彼の弁解は容易ではなく、まして、道長の感嘆の言葉を引きだすことなど、思いも寄らないことになるに違いない。

公任の第八句目の「還耻不廉心」（還ツテ不廉ノ心ヲ耻ツ）という語句は、もしも、「拾葩」を以上のように「拾塵」の故事に掛けて理解すると、より一層、内容がわかりやすくなるように思う。例えば、「不廉心」は、すでに「語釈」の項で述べたように、心が廉潔でない意であるが、これは、顔淵の「道徳」的な配慮（心）と比較して言ったことになる。顔淵の動作は、あくまでも「道徳」的な配慮（心）によってなされたものであり、公任のそれは、あくまでも「美」的執着心によってなされたものであった。それ故に、前者には廉潔な心の存在が認められ、後者には廉潔ならざる心の存在を認めないわけにはいかない。作者の公任は、顔淵の廉潔な心に比較して、自己の「不廉心」を恥じなければならぬことになる。そして、それ故に、顔淵が孔子から受けたような感嘆な言葉を、今、道長から受けるという期待がまったくないことを悔まずにはいられないことになる。

さて、もう一つ、第八句目の「拾葩」中に、あるいは、「葩」字との関連で、「揚葩」（葩ヲ揚グ）の意味が掛けられているとも考えられる。「揚葩」とは、花をあげる意であり、転じて、文章の才を発揮することになどえられる。その出典は「北史」八「文苑伝序」Vであり、「漢ハ孝武ヨリノ後、雅（ツ）ねニ斯ノ文ヲ尚ビ、

葩ヲ揚ゲテ藻ヲ振フ者ハ（揚。葩振藻者）林ノ如シ。而シテ二馬・王・楊ハ之ガ傑爲リ。東京ノ朝ニハ、茲ノ道ハ逾（いよいよ）扇（さかん）ニ、微（ち）ヲ阻ミ商ヲ含ム者ハ市ヲ成ス。而シテ班・傅・張・蔡ハ之ガ雄爲リ。」という一文中に見える。

もしも、「拾葩」という作者の動作を示す詩語に「揚葩」「拾葩」と「揚」とが意味上も近似していることに注意。ただし、「揚」字は平声。）の意味が掛けられているとすると、勿論、作者の公任の「葩」（はな）を手にすくい取ろうとする動作は、当日の作文会において詩をつくり、道長をはじめとする出席者に自己の文才を披露する意味にたとえられていることになる。つまり、「葩」は素晴らしい文才ということになり、それによってつくられる素晴らしい作品（詩）ということになる。さわやかな「鳥」の声を耳にし、美しい「花」を目にしながら、今、より一層の文才を發揮すべく詩をつくろうとしている、というほどの意味にそれはなるに違いない。

公任の第八句目の「還耻ニ不廉心」という語句も、もしも、「拾葩」を以上のように「揚葩」の意味に掛けて理解すると、これまた、その内容がよりわかりやすくなるように思う。

文章（詩）とは、「初メ楚（孫楚）ハ婦ノ服（喪服）ヲ除（はら）フヤ、詩ヲ作りテ以テ済（王済）ニ示ス。済曰ク、未ダ文ノ情ニ生ジ、情ノ文ニ生ズルヲ知ラザルモ（未知。文生於情、情生於文）、之ヲ覽レバ、悽然トシテ伉儷（かうれい・夫婦）ノ重キヲ増ス、ト。」ハ「晋書」卷五十六「孫楚」伝Vとあるように、その作者の心情とまことに密接な関係にあるとされているが、ここにも、そのような発想があるのであろう。もし、文章（詩）が作者の心情によって生

まれるもの（あるいは、作者の心情が文章ハ詩Vによって発動させられるもの。）ならば、素晴らしい文章（詩）をつくるためには、どうしても素晴らしい心情がなければならぬ、ということになる。公任の第八句目の「拾葩」に「揚葩」の意味を掛けて理解するためには、そのような発想を背景に考える必要がある。

さわやかな「鳥」の声を耳にし、美しい「花」を目にしながら、今、より一層の文才を發揮すべく詩をつくろうとしている作者の公任なのであるが、ふと、素晴らしい詩をつくるための前提条件である、素晴らしい心情（廉潔な心）の欠乏に思い到り、思わず恥じ入らざるをえなくなる。この場合、そのような意味になるだろう。

もしも、このように、「拾葩」に「揚葩」の意味が掛けられているとみなすならば、公任の尾聯の発想は通直のそれになります。近似していることになる。つまり、「花鳥」の素晴らしさの中で我が身の不廉を反省する公任と、同じく我が身のみすばらしさと不遇な身の上を嘆く通直との間に、確かに発想上の近似性は認められる。しかし、公任の「不廉ノ心ヲ耻ヅ。」という詩句は、その場合においても、やはり詩的表現と見なさなければならぬだろう。なぜなら、すでに述べたように、本詩をつくった寛弘三年三月二十四日の

道長郎作文会での公任は、念願の「從二位」の位階を賜わるとともに、公的な作文会への積極的な参加によって当時の漢文学壇における指導的立場を改めて手中にしていたはずだからである。

それにしても、本詩は、その形式といい、その内容といい、すこぶる整然として技巧的（理智的）である。いかにも公任らしい、例えば、和歌の方でも、「凡そ歌は心深く、姿清げにて、心にかし

きところあるをすぐれたりといふべし。八「新撰隨腦」Vとの主張を持つていた彼らしい作品と言えよう。とりわけ、第八句目における「拾遺」という詩語の使用などに、「詞たへにして余りの心さへある。」八「和歌九品」V歌を理想とした彼の文学理論の漢詩への展開を見る思いがしてならない。

(上の10) 同前。

江通直*

花鳥有_レ時興味深、三春資貯一園心。

生涯被_レ養飄_レ林色、行路不_レ貪出_レ谷音。

落_レ蕊封_レ来_レ三_レ万_レ戸、清歌_レ募_レ得_レ是_レ千_レ金。

為_レ吾_レ未_レ有_レ陽和德、鬢雪甚寒任_レ陸_レ沈。

〔訓詁〕同前。

江通直

花鳥は時有りて興味深く、三春の資貯一園の心。生涯は養はるる林に飄(ひるがへ)るの色、行路は貪しからず谷より出づるの音。落蕊(らくくずる)は封じ来れば(まさ)に万戸なるべく、清歌は募(つ)り得たれば是れ千金なり。吾に未だ陽和の徳有らざるが為(ため)に、鬢雪(びんせつ)は甚だ寒(こご)えて陸沈(りくしん)に任(た)ぶ。

〔通釈〕前に同じ。

大江通直

花と鳥とは今や良い時節を迎えますます興味を増しています。この庭園に集った人々すべての心にとつては、これらのものがまさしく春の財宝であると申せましょう。(なぜなら、春は)林にヒラヒラと乱れ散る美しい花びらをこのように見せることによつて人々の寿命を長らえさせますし、谷にさえぎり歌う素晴らしい鳥の声をこのように聞かせることによつて人々の人生を豊かにさせます。その林に乱れ散る花びらが人々の目を喜ばせるのは、たとえ一万户の封土を与えられた時のようでもあり、その谷に響き渡る鳥の声が人々の耳を楽しませるのはまるで一千金の募金を手にした時のようでもある。(しかし、これらの本日参会の人々の中にあつて)わたくしだけにはいまだ恵みの春の訪れはなく、雪のような白髪頭はなおも冬の寒さにこごえ、儒生として世間から見捨てられていることにひっそりと耐えしのんでいます(ですから、今日の、美しい花の色と素晴らしい鳥の声にも、心から目を喜ばせ耳を楽しませることができません)。

〔校異〕○直―底は、判読不能につき、漸以下に従う。○募―底は、この右横に「ツノリテ」の傍訓あり。○吾―底は、この右横下に「カ」の送りがなを付す。○未―底は、この右横下に「タ」の送りがなを付す。また、左横に「ス」の送りがなを付す。○有―底は、この右横に「ラ」の送りがなを付す。○鬢―紀は、「再」字に作る。「鬢」の俗字。

〔語釈〕

○有時 時あって、の意。「周礼」八「冬官」考工記Vに、「天ハ時有りテ以テ生ゼシメ、時有りテ以テ殺サシム。草木ハ時有りテ以

テ生ジ、時有リテ以テ死ス(草木有_レ時以生、有_レ時以死。)。との用例あり。なお、本文では、春という良い時節を迎えて、の意となるが、より具体的には、この「時」は、作文会が開かれた(寛弘三年)三月二十四日当日を指示する。時節は晩春である。

○興味深 「興味」は、おもむき・興趣、の意。例えば、「権記」△長保二年十二年二日条▽などにも、「盃酌八頻(しきり)ニ巡リテ、興味ハ漸ク促サル。」と使用されており、また、すでに述べたように、匡衡の同題詩△「江吏部集」下▽の第一句目の同位置にも、同じ「興味深」の語句で使用されている。「杜少陵詩集」にも、「興ハ深クシテ終ニ淪(かは)ラズ。」△卷十九「槐葉冷淘」▽などの一句が見える。

○三春 春の三ヶ月のことで、孟春(陰曆正月)・仲春(同二月)・季春(同三月)をいう。嵇康の「琴賦」△「文選」卷十八所収▽には、「三春ノ初メニ、麗服ハ時ヲ以テス。」とあり、その李善注にも、「班固ノ終南山ノ賦ニ曰ク、三春ノ季ニシテ、孟夏ノ初メナリ、ト。」とある。例えば、「本朝文粹」などにも、「聊カ栄花ヲ翰林ノ三春ニ発シテ、將ニ故実ヲ学稼ノ万代ニ伝ヘントス。」△卷六・大江以言「申ニ弁官並左右衛門権佐ニ状」。なお、これには寛弘四年二月二十二日の日付けあり。▽とか、「万機ヲ一日ニ留メテ、三春ヲ二句ニ玩ブ。」△卷八・菅贈大相国「早春侍宴賦」春暖「詩序」▽とかと使用されている。また、「菅家文章」にも、「三春見ル処天桃紅ナリ。」△卷一「賦」得赤虹篇▽とか、「徳化ハ三春ニ在リ。」△卷三「賦」得春之徳風▽とか、「半年長ク聴ク三春ノ鳥。」△卷五「劉・阮遇ニ溪辺ニ女ニ詩」▽とかの用例が見える。ただし、本詩の場

合、より具体的には、作文会が開かれた(寛弘三年)三月二十四日当日、つまり季春を指示している。

○資貯 (上の8) 詩の「語釈」参照のこと。

○一園心 (上の8) 詩の「語釈」参照のこと。ただし、(上の8) 詩の第六句目の「一園心」が庭園一杯に乱れ散る花(「心」は「花心」)であり、花のしん・しべの意。)という意味であったのに対して、本詩では、庭園に集った人々すべての心(「心」は「人心」)であり、匡衡の同題詩の第二句目に、「作春資貯感人心。」とあるように、人々の心中の意である。)という意味にとる必要がある。なぜなら、本詩の場合には、「心」を「花心」ととると、「三春ノ資貯」は「花」だけに限定されてしまい、「鳥」がその中に含まれなくなってしまうからである。やはり、本詩の場合、「心」は「人心」の意でなければならぬだろう。庭園に集った人々すべての心にとつて、花と鳥とがまさしく春の財宝である、ということではなればならないからである。

○生涯被養飄飄色 「生涯」は、命のある限り・生きている間、の意。「莊子」△「養生主」▽に、「吾ガ生ヤ涯(かぎり)有ルモ、知ヤ涯無シ。」とある。例えば、「白樂天詩集」には、「生涯ハ落トシテ性靈ハ迂ナリ。」△卷十四「郗居、寄張殷衡」▽、「生涯ハ共ニ寄ス滄江ノ上。」△卷十七「十年三月三十日、別徹之於澧上」……▽など多数の用例が見え、また、「菅家文章」にも、「生涯ハ未ダ肯ヘテ閑(のど)カナラズ。」△卷二「樵夫」▽、「生涯ハ性ヲ養ヒテ年華美シ。」△卷五「吳生過老公詩」▽などの用例が見える。さらに、「本朝文粹」にも、「生涯ハ海ヲ阻テ、雲濤ハ幾里ゾ。」

△卷七・後江相公「為清慎公、報吳越王書」▽などである。ただし、本詩の場合には、「壽命」と訳した。「生涯」を「壽命」と訳す例としては、「生涯二分限有ルモ、愛恋ニ終ハリ已ム無シ。」△「白楽天詩後集」卷四「戒業」▽、「吾ガ党ノ数人、生涯ハ日暮レス。」△「本朝文粹」卷九「菅三品」春春、藤田相山庄尚齒會詩。▽、「生涯ハ暮レテ、蹶（あと）ハ將ニ隠レントス。」△同上卷十・橘正通「同賦」梅近夜香多、応教。▽などがそうであろう。

「被」は受身、「養」は養生の意。すなわち、「生涯被養」で、生命を養ひ、長寿を保つようにすること。

まず、用語の上では、さきにあげた、「生涯ハ性ヲ養ヒテ年華美シ（生涯養性年華美）」△「菅家文草」卷五「呉生過老公詩」▽の句が近似しており、また、「養」字の対語である第四句目の「貧」字との関連で、後に述べるように、「静ヲ養ヒ貧ヲ資（たす）ケテ而（ふた）ツナガラ余リ有リ」養静資貧兩有（余）」△「白楽天詩後集」卷九「送陝州王司馬建赴任」▽の句の影響などが考えられる。

次に、内容の上では、必然的に嵇康の「養生論」△「文選」卷五十三所収▽などとの関連を考える必要があるだろう。「養生論」には、「善ク生ヲ養フ者ハ」清虚静泰ニシテ、私ヲ少クシ慾ヲ寡（すへな）クス。」とあり、「養生法」としては、心を安静にして我欲を捨てる必要があると言っている。また、「新論」△「防慾」篇▽にも、「將ニ情慾ヲ収メントスレバ、先ヅ五閔ヲ斂（をさ）メヨ。五閔ナル者ハ、情慾ノ路ニシテ、嗜好ノ府ナリ。目ノ緑色（美人のことで、「色」は女色の意。「緑」は次句の「淫」の対語。）ヲ愛スルハ、命ジテ性ヲ伐ルノ斤（をの・斧に同じ）ト曰フ。耳ノ

淫声ヲ樂シムハ、命ジテ心ヲ攻ムルノ鼓ト曰フ。口ノ滋味ヲ貪ルハ、命ジテ腸ヲ腐ラスノ薬ト曰フ。鼻ノ芳香ヲ悦ブハ、命ジテ喉ヲ燻（や）クノ煙ト曰フ。身ノ輿駟ニ安ズルハ、命ジテ蹙（けつ）つまづクヲ召クノ機ト曰フ。此ノ五ナル者ハ、以テ生ヲ養ヒ、亦タ以テ生ヲ傷フ所以ナリ。」とあり、「養生」法としては、情欲をなくすこと、つまり、五閔（目耳口鼻身）を正しくとりしめることが必要であると言っている。

勿論、前者の「清虚静泰」は「少私寡欲」の対句であり、両句は同一の意味でなければならぬ。すなわち、前者の「養生論」においては、心を安静にすることがそのまま我欲を捨てることなのであり、それが最上の「養生」法ということになるのである。この、我欲を捨てるのが最上の「養生」法だとする前者の発想をそのまま発展させて具体化したのが後者の「防慾」篇における「養生」法であろう。その後者において、「慾ヲ防グ」（最上の「養生」法）ことが五閔に関連付けて説明されていることに、今注目したい。とくに、「目」について、それが女色を愛するようなら、「伐性之斤」（生命を断つ斧）となるであろうと言いつつ、「目」や「耳」について、それが淫声を樂しむようなら、「攻心之鼓」（心中を悩ます太鼓）となるであろうと言いつつ、つまり、「目」や「耳」を女色や淫声から遠ざけて心を安静に保つことが「養生」法として大切なことだと主張しているのである。

ところで、本詩（第三句目）の「色」は、次句（第四句目）の「語」かるよ（鳥の声）の対語であり、「林ニ飄ル」ともあることからわうに、勿論、「花の色」の意である。「花の色」が「目」を喜ばせ、

あまつさえ、作者が「生涯ハ養生」と言つてこれを「養生」に効用ありと説いている背景には、上記の如き「養生論」や「新論」ハ「防窓」篇√などの発想の存在を認めないわけにはいかないだろう。ここにおいて、作者は、「花の色」を、恐らく、意識的に「伐性之斤」である「女色」に対比させているに違いない。「養生」法からは、「女色」は遠ざけねばならないものであった。しかるに、同じ「色」と言つても、「花の色」はどうか。こちらの方は、むしろ、「養生」に効用がある、と作者は断言している。なぜか。花は、例えば、「花柳ハ更ニ私（わたくし）無シ。」ハ「杜少陵詩集」巻九「後遊」√とあるように、それ自体、利己心が無い故に、見る者をしておのずと我欲を捨てさしめるからであり、また、例えば、「閑ニ居リテ花木ヲ好ム。」ハ孟浩然「白雪先生王廻見訪詩。」√とあるように、それ自体、静閑と結び付く故に、見る者をしておのずと心の安静を保たしめるからである。つまり、「花の色」を「目」にすれば、見る人の心は安静になり、我欲を捨てないではいられない。すなわち、最上の「養生」法なのである。以上のように、「花の色」を「目」にすることがまさしく「養生」に直結するはずだ、との作者の論理には、このような背景説明が必要であるう。

なお、「花の色」を目にすれば、心が「清虚静泰」となり、「少し私寡欲」となり、結果的には最上の「養生」法となるはずだ、という本詩(第三句目)のような論理は、例えば、「亜相ハ之ヲ悦ビテ、顧ミテ示シテ云フ、吾ガ党ノ数人、生涯ハ日暮レヌ。其レ老志ヲ寛(ゆたか)ニスルニハ須カラク古賢ニ慣(なら)フベシ。東山ノ別

「本朝麗藻」全注釈(四)

業ニハ、水有リ花有リ。……暮春三月、煙景最モ好シ。……鳥ハ迎ヘテ林堂ニ昇ラシム。……未ダ此ノ会ノ首上ハ皆霜ニ、阻中ハ共ニ露ナルモノノ、進ミテハ王道ヲ樵路ニ談ジ、退キテハ風情ヲ雲心ニ混ジ、一觴一詠モテ、其ノ間ニ性ヲ養フ。(養生)ニハ若カズ。」
 △「本朝文粹」巻九・菅三品「暮春、藤亜相山庄尚齒會詩。」√という一文中などにも見える。これも、季節は「暮春三月」であり、「花」や「鳥」によつて「養生」すべきことを説いている。語句や内容の上で本詩との影響関係が考えられ、大いに注目される。

八一九八四・九・二〇、未完√